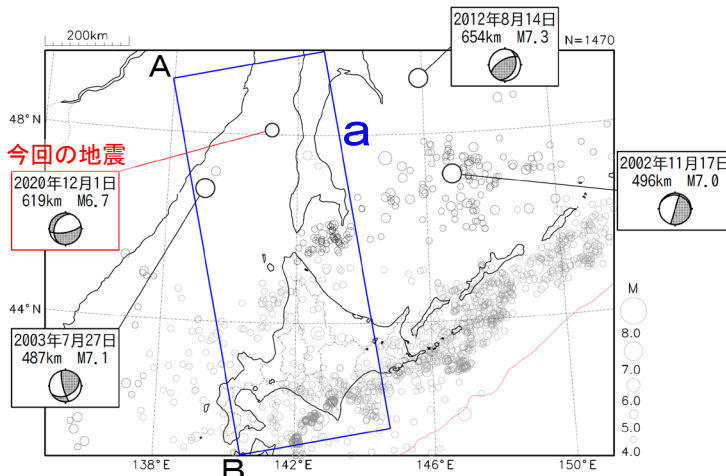
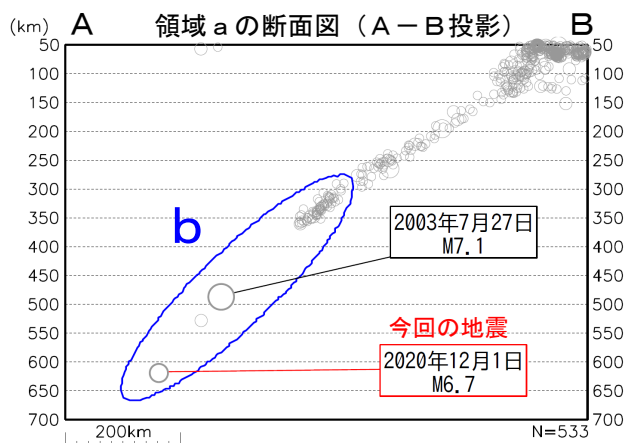


12月1日 サハリン西方沖の地震

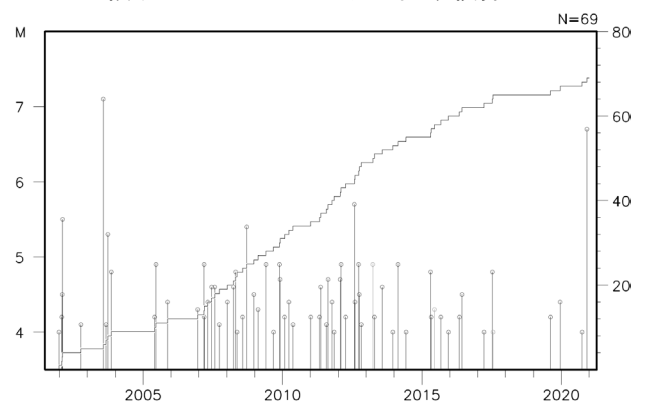
震央分布図
(2001年10月1日～2020年12月31日、
深さ 50～700km、 $M \geq 4.0$)
震源の深さが 300km 以深の地震を濃く表示
図中の発震機構は CMT 解



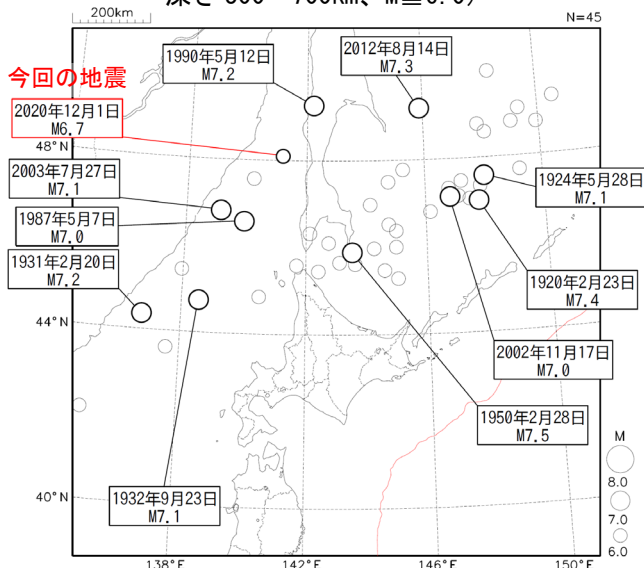
赤線は海溝軸を示す。



領域 b 内の M-T 図及び回数積算図

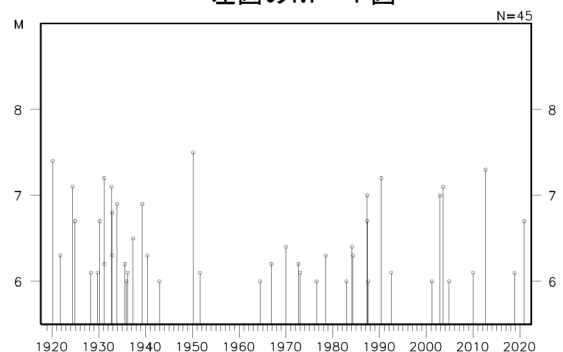


震央分布図
(1919年1月1日～2020年12月31日、
深さ 300～700km、 $M \geq 6.0$)



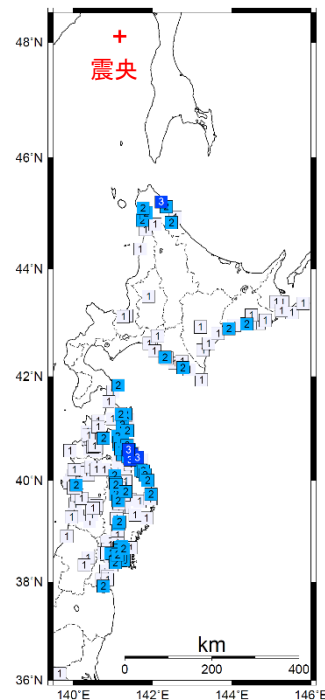
赤線は海溝軸を示す。

左図の M-T 図



この期間は地震の検知能力が低い可能性がある。

12月1日に発生したサハリン西方沖の地震の震度分布図



〔震度3が観測された地点〕

* 印は気象庁以外の震度観測点についての情報。

北海道	震度3	猿払村浅茅野*
青森県	震度3	八戸市内丸*
		八戸市南郷*
		おいらせ町中下田*
		階上町道仏*

【参考】震央付近の場所よりも震央から離れた場所で大きな震度を観測する地震について

震源が非常に深い場合、震源の真上ではほとんど揺れないのに、震源から遠くはなれた場所で揺れを感じることがあります（次ページ参照）。この現象は、「異常震域」という名称で知られています。原因は、地球内部の岩盤の性質の違いによるものです。

プレートがぶつかり合うようなところでは、陸のプレートの地下深くまで海洋プレートが潜り込んで（沈み込んで）います。通常、地震波は震源から遠くになるほど減衰するものですが、この海洋プレートは地震波をあまり減衰せずに伝えやすい性質を持っています。このため、沈み込んだ海洋プレートのかかなり深い場所で地震が発生すると（深発地震）、真上には地震波があまり伝わらないにもかかわらず、海洋プレートでは地震波はあまり減衰せずに遠くの場所まで伝わります（下図）。その結果、震源直上の地表での揺れ（震度）が小さくとも、震源から遠く離れた場所で震度が大きくなる場合があります。

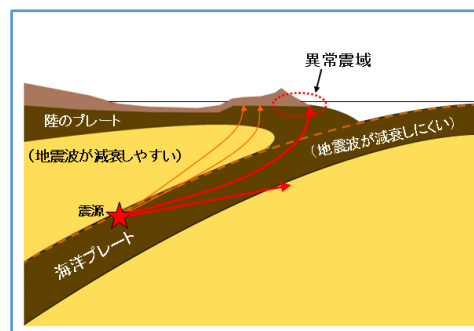
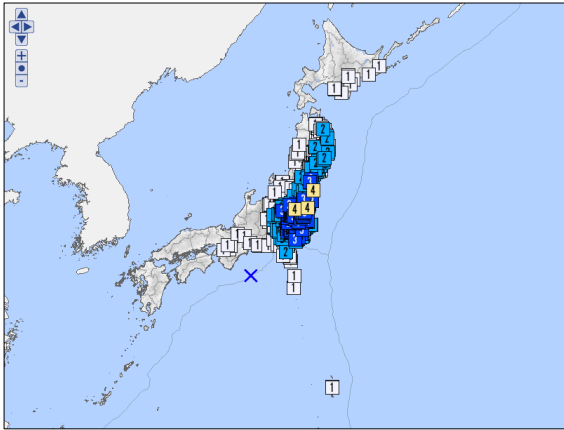
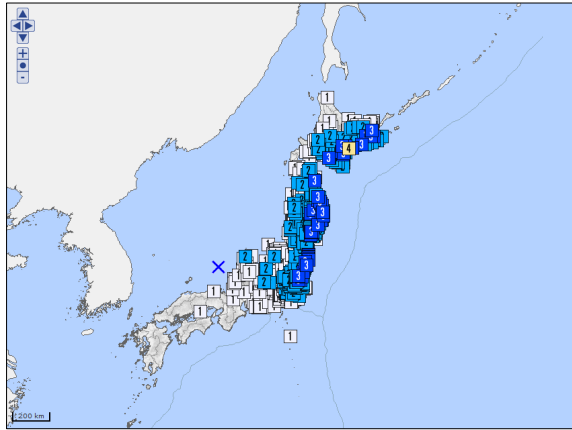


図 深発地震と異常震域

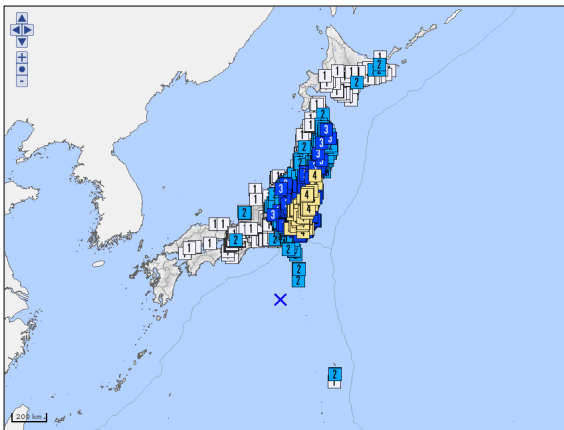
◇ 異常震域のあった過去の地震の震度分布図の例



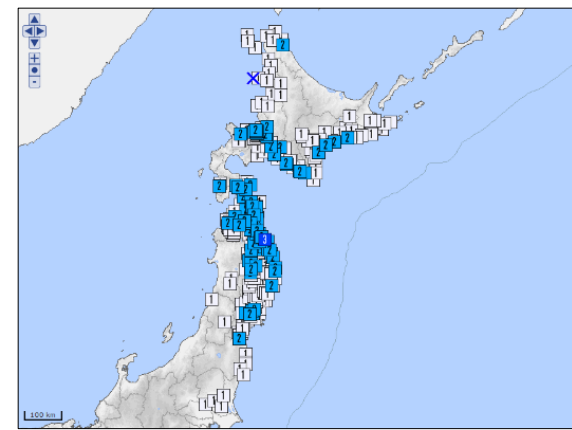
2003年11月12日の三重県南東沖の地震
(M6.5、震源の深さ396km)



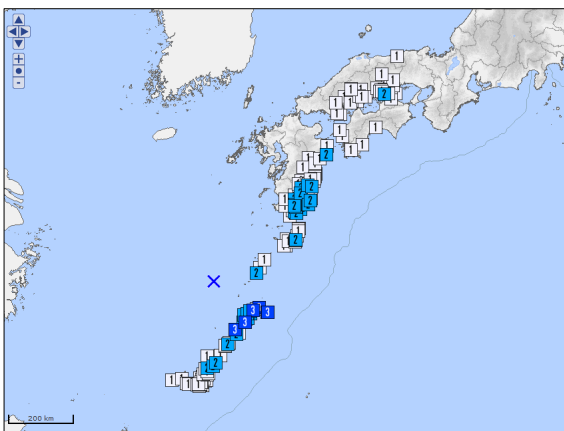
2007年7月16日の京都府沖の地震
(M6.7、震源の深さ374km)



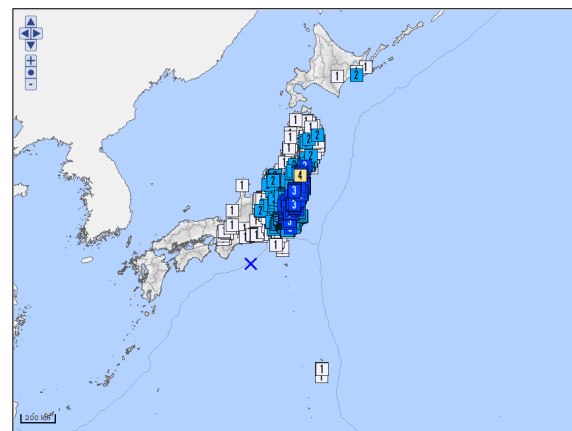
2012年1月1日の鳥島近海の地震
(M7.0、震源の深さ397km)



2016年1月12日の北海道北西沖の地震
(M6.2、震源の深さ265km)



2019年7月13日の奄美大島北西沖の地震
(M6.0、震源の深さ256km)



2019年7月28日の三重県南東沖の地震
(M6.6、震源の深さ393km)

※震度分布図は気象庁の震度データベース検索

（気象庁ホームページ：<https://www.data.jma.go.jp/svd/eqdb/data/shindo/index.php>）にて検索したものを使用。

※震度分布図の地図に国土交通省国土数値情報のデータを使用している。